

土木学会誌編集上の資料とするため、41 巻 10 号にアンケート用のハガキを添付しましたが、一部の会員から、つぎのような回答を得ましたので、簡単に報告します。 【編 集 部】

1. 現在の会誌の程度

ちょうどよい	むづかしい	やさしすぎる	意見なし
71.1%	21.7%	4.9%	2.3%

2. 現在の編集方針について

よいと思う	改めてほしい	意見なし
71.8%	21.7%	6.5%

3. 編集方針にたいする意見

編集方針はよくなったとの御意見が多く見受けられたが、報告がまだ学究的でありすぎるとか、現場技術者が参考となり理解できるものを対象とするものが望ましいとか、工事報告を多くせよとの意見も見られた。しかし、これとは反対に、工事報告が多すぎるとか、工事報告誌とならないよう学会誌としてのプライドを持たなければならないとか、4月号以前の学会誌編集方針の方がよかつたと述べられた少数意見や、今少し学会誌の特色を出すようにとの助言的意見を述べられた方も見られた。報告について、資料・講座・文献抄録・ニュース欄の拡充や増ページ（80ページ程度）を要望される方や、工事写真を多く掲載することを望まれている会員も相当あることがわかつた。また、会誌の裁断寸法が毎月その大きさを異にしていることや、昔は広告がなかつたのに最近では広告が余りに多すぎると述べられた方もあつた。

編集部より 毎月裁断寸法が一定でないことは申訳ありません。これは3種郵便の送料は100grまでは4円で、超過すると+4円の加算となり、毎月の発送部数を13000部として、年間の負担は48万円も増加し、原稿・広告・挿入物、等の関係で、100grを超過するときは、止むなく最小限度の裁断をしているので御諒解願いたいと存じます。つぎに、広告の多いことではありますが、これは学会経理上の都合からで、会費の値上げをしないかぎり、広告を減らすことはむづかしいと考えています。ただ、広告のあり方については外国雑誌のように、感じよく役立つ広告とするよう、目下検討中です。

4. 記事の内容に関する希望

(A) 希望する記事・著者・部門・講座および表紙

(1) 記事：工事報告が最も多く要望され、新施工法や新材料の紹介、土木工学界の展望に関する座談会、論争を展開するような報告、立案中の土建に関する法案の

要項、品質管理、構造力学の新分野の紹介、各官庁の中堅技術者の抱負、英・独・仏の専門語特に略語の紹介、総説的記事の毎月掲載、先輩の体験談、等があつた。

(2) 著者：名を挙げた方は少なかつたが、吉田徳次郎氏・国分正胤氏のコンクリート、岩井重久氏の推計学の工学への応用に関するもの、等が見受けられた。

(3) 部門：構造物（特に鉄筋コンクリート）の設計、橋梁、水理、水文に関するものが多く、道路、河川、土質、衛生、港湾、鉄道、等。

(4) 講座：構造物の設計・水理・構造力学に関するものが多く、橋梁、応力測定、推計学、溶接、港湾、発電水力、土木施工法（積算、契約、仕様監理）等。

(5) 表紙：表紙については大体よいというのが大部分だつたが、“土木学会誌”の字体が古くて現代観にマッチしないとの少数意見や、あまりにもことなかれ主義だとの意見もあり、もとの古い表紙の方が学会誌らしくてよかつたというも2通あつた。これに反して、表紙に工事写真を掲載したらとの意見もかなりあり、また、表紙に目次を掲載する方が便利でよいとの意見もあり、なお、表紙はいつでもよい、要は内容が第一であると、はつきり割り切つた意見をもっている方もあつた。

編集部より 諸外国の商業雑誌で写真を表紙に使用しているものは多く見受けられますが、学会誌にはあまり見受けられません。

(B) 拡充すべき欄、存在の必要を認めない欄、新設した方がよい欄

(1) 拡充すべき欄：報告（特に工事報告）、資料、講座、文献抄録、ニュース、文献目録、書評、技術相談の順位となつていた。

(2) 必要としない欄：利用度の少い報告、書評、学会記事、広告、論文要旨、等があつたが、これを記入された方はきわめて少数であつた。

(3) 新設した方がよい欄：技術相談、報告にたいする質疑応答、読者の声、設計計算例、特許関係、優良図書への推せん、新材料の紹介、人事異動、人物紹介、諸外国事情、資料物価表、常識的な土木史、現場めぐり、工事写真、等が記載されていた。

編集部より 技術相談や読者の声（会員欄）はすでに開設されていますから十分活用して下さい。報告にたいする質疑は従来通り著者に連絡して応答してもらいますから振つて御投稿願います。

以上のような結果でしたが、本企画に協力して、貴重な編集資料を寄せられた方々に、深く感謝の意を表します。これを参考として会誌の改善に努力する考えですが御気づきの点がありますならば、御教示下さい。

橋本規明著 新河川工法 森北出版刊

土木の対象となるものは数多いが、そのなかでも河川ほど気まぐれで、つかみどころのないものはない。一つ一つの河川はその性格がまるでちがうし、また同じ河川でも生き物のようにたえず生成発展している。このような河川を処理する工法に対し、在来のもを比較的無批判に踏襲している現状を、著者は 30 年の現場体験の間に疑問を持ち、在来工法の根本的改良に没頭され、その成果に対しては建設大臣の表彰、紫授褒章、中部日本文化章などの各種表彰を受け、その功績の大きいことがわかる。著者のこの貴重な 30 年間の体験と成果を 1 冊にまとめて世に発表されたのがこの本である。

この本の内容は、序論、根固工法の考え方、新しい急流河川の根固工法、滑動式根固工法、水中間接連結式固工法、両撓式根固工法、両撓式根固床工、両撓式法覆工法、荒廃河川の処理、荒廃河川の特長、水源および山間部においてとるべき処理、下流有堤部における河川の処理、北陸河川の基本的問題の 13 章と付録としての歩掛表とよくなっている。すなわちこの本の前半は護岸、水制、床固、ダムなどの河川工作物に対する根固工法と

法覆工法として著者の研究考案したコンクリート・ブロック工法をのべたものである。河川の災害を防止軽減するために、より耐久性をもつたものという見地から考案されたものであるが、この本にはそれらの工法の説明だけでなく、工法の考え方、設計施工上の注意、またそれら工法の長所短所などものべられている。また有難いことには、それらのうちの優秀工法と思われるものには、詳細な図面や歩掛表までつけられている。本書の後半は常願寺川や、黒部川などと取組まれた著者の経験をもとにして荒廃河川の処理方法がのべてある。

河川はそれぞれ性格がちがうものであるから、これらの新工法を、機械的に無批判にどこにでも採用するというわけにはゆかないかもしれない。その場合場合にに応じて、その得失や適否を十分検討することが必要であるが、そのためにもこのように詳細に、かつ具体的に書かれていることは良心的な著書として推せんできる。そして、これらから河川工法を勉強される人にも、また現在河川の工事に従事している人にも、非常に役に立つであろう。

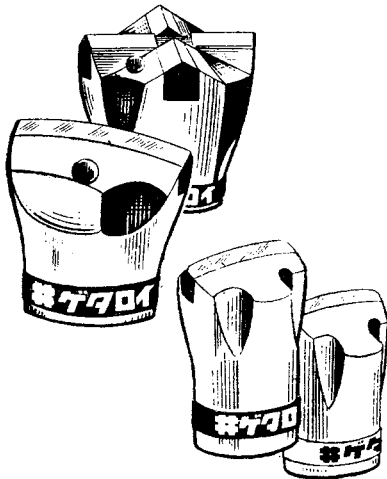
著者：正員 工博 名古屋工大教授、A4判 308 ページ、上製箱入、定価 1500 円 昭.31.7.10 刊



作業の合理化に!

超硬工具

井ゲタロイ



クロスビット

カービット

住友電気工業株式会社

大阪・東京・名古屋・福岡